

華岡青洲 医案①

勢州文蔵なる者、年三十歳。膈噎を患う。平山に來たり、治を乞う。按ずるに、食を欠き、一粒も咽へ下ること能わず。

師曰く、「此れ、全く膈噎の証なり。心下より中脘に至りて、長さ二寸許りの筆の軸の如きの攣急あり」。師曰く、「即ち此の攣急、全く膈噎の病根なり。消散せねば治するとうことなし」。

主方順氣和湯兼膈噎奇方、日々に用いること三分。即ち冷水を以て服す。六日を経て始めて欠食咽へ下ることを得たり、後一月を経て全治す。